

探究と国際交流の両輪で、自ら学ぶ意欲をもつ グローバルファシリテーターを育成

長野高校 (長野・県立)

8年前から改善を重ねてきた探究活動をベースに、
探究と国際交流を両輪として、地域を担う人材育成に取り組む長野高校。
生徒一人ひとりのグローバル視点やファシリテーターとしての多様な力の育成を大切にしています。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

- 🔍 グローバルファシリテーター
- 🔍 レイヤー的思考
- 🔍 ブレイクスルー発想
- 🔍 国際的な対話力
- 🔍 探究
- 🔍 国際交流
- 🔍 地域との協働
- 🔍 総合的な探究の時間

レイヤー的思考・ブレイクスルー 発想・国際的な対話力を重視

県下屈指の進学校である長野高校は、
長野の未来を担う人材を育むための独
自プログラム「NGP(長野グローバルプロ
ジェクト)」を2019年度に立ち上げた。

NGPの前身は、14年度にスーパーグロ
ーバルハイスクール(SGH)の指定を受け
て導入した探究活動だ。全国的にまだ探
究実践例が少ないなかでの挑戦だったが、
「探究活動によって、自ら社会課題に取り
組む意欲や自分の考えを発信する力な
ど、従来は埋もれがちだった生徒の多様な
力を伸ばせることがわかった(松澤望美
先生)など、多くの教員が生徒の成長に
手応えを感じたという。

そこで、5年間のSGH指定期間終了後
も探究活動を継続・発展させていくことと、
新たに文部科学省「地域との協働による高
等学校教育改革推進事業(グローバル型)」
に手を上げた。SGHで培ってきた国内の
大学、近隣の高校や企業・団体、海外の大
学や高校などとのネットワークを活かすこ
とにも、行政や大学、企業と地域コンソー
シアムを組織して定期的に助言をもらっ
たなどの支援体制を整備。SGHの探究をベ
ースに、地域とのつながりを強化したNGP
プログラムへと進化を図った。その目標に掲
げるのは「SDGs未来都市を創造するグロ
ーバルファシリテーターの育成」だ(図1)。プロ
グラムの立ち上げ時から携わるNGP係主
任・海沼孝典先生はこう話す。

「グローバルファシリテーターの象徴的な活

動として3年間の大きな到達点に掲げてい
るのは、地域課題に対して世界を見据えた
政策提言を行うこと。これに向け、異なる
立場の人の話に耳を傾けて多様な視点か
ら物事を見る『レイヤー的思考』や、従来の
枠組みを超えて現状突破できる『ブレイク
スルー発想』、世界を視野に入れて学ぶため
の『国際的な対話力』を重視し、プログラム
や指導方法の改善を図ってきました」

生徒主体の課題研究を通じて 自ら学ぶ楽しさを伝える

NGPには大きく課題研究と国際交流
の2つの柱がある。

課題研究は、1・2学年の総合的な探究
の時間で展開する、地域課題の解決策を
探る活動だ(図2)。1学年では、まず基礎
スキルとしてブレインストーミングやディス
カッション、インタビューの方法を体験的に
学習する。そして、さまざまな経験を積ん
だ外部講師との対話を通じて社会課題
に対する関心を高めつつ、グループで
探究活動を行う。20年度の1年生は「理
想的な工場開発と観光の両立」「地域医
療の現状と課題」「災害と対策」など多様
な地域課題をテーマに取り組んだ。

NGPではローカルとグローバルの両方
の視点をもって地域課題に取り組むこと
を目指しているが、「海外で成功している
解決策を、そのまま長野に当てはめても
うまくいくとは限らない。長野の特徴をし
っかり調べて理解したうえで考えることが
大切(海沼先生)」と、1学年ではまずロー
カル視点に重点を置く。地域の課題の現



School Data

1899年設立／普通科
 生徒数838人(男子415人・女子423人)
 進路状況(2020年3月卒業生)
 大学187人・その他90人
 長野県長野市上松1丁目16-12
 TEL 026-234-1215

Outline

創立122年の歴史と伝統をもつ進学校。2014年度に文部科学省スーパーグローバルハイスクールの指定を受け、探究活動を導入。19年度より文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)」指定。探究と国際交流を組み合わせた人材育成プログラム「NGP(長野グローバルプロジェクト)」に取り組んでいる。



グローバル教育推進室
 松澤望美先生



グローバル教育推進室
 主任
 海沼孝典先生

状やその原因を探るためにオンラインを含むフィールドワーク(FW)を実施するが、生徒自ら大学や企業・団体を探して依頼し、生徒のみで訪問やオンラインインタビューを行うのが同校のFWの特徴だ。

年度末には各グループが探究内容をまとめ、大学や企業・団体から講師を招いて課題研究発表会を開催。各会場は4つのグループで構成され、順番にグループ発表を行い講師に講評をもらうほか、発表ごとにその研究テーマについて少人数でディスカッションを行う。ファシリテーションは各会場担当の生徒スタッフがを行い、発表グループのメンバーも分散して参加する。

「自分たちの研究以外にも関心をもって考え、他グループの発表やディスカッションで出る意見から、自分にはない視点や発想を学んでほしい」(海沼先生)

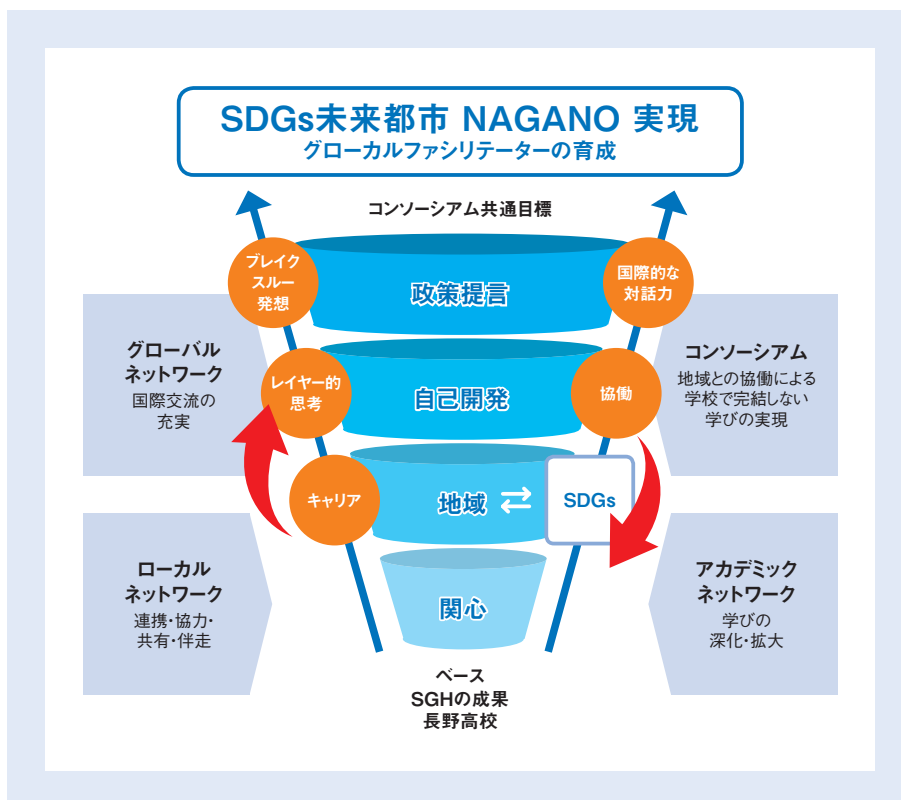
FWや発表会などさまざまな場面で生徒を主体とした活動が目立つが、そこには「自ら学ぶ楽しさを知ってほしい」という思いが込められている。

「本校には学習意欲の高い生徒が非常に多いのですが、大学受験を意識して教科学習だけがんばるといふ生徒がいるのも事実です。学びの本来の楽しさは、受け身でなく、自ら学びに向かうところにあるもの。NGP活動を通じて、そんな学びの楽しさを知ることにつながればと考えています」(海沼先生)

**一人ひとりの力を伸ばし
 テーマを深める個人研究**

2学年では、約1年間かけて個人研究

図1 NGP(長野グローバルプロジェクト)全体像



※学校が作成した図を基に編集部にて作成

に取り組む。1学年で取り組んだテーマを継続しても、新たなテーマを掲げても自由だ。20年度の研究論文には、「AI」と農業の関わりとは「若者の県外流出が経済に及ぼす影響とその対策」「雪」から長野の観光を考える」といった地域課題への取組が並び、海外の事例やデータを踏まえた内容も目立つ。

NGP開始当初は2学年でもグループ研究を行っていたが、生徒一人ひとりが本

当にやりたいと思うテーマを存分に探究できる点を重視し、20年度から個人研究に変更した。「ねらい通り生徒の研究テーマは多様化してきた」と海沼先生。それに伴って、1学年時と同様に生徒主体で行うFWにおいても、新たなFW先を開拓して個別に訪問するケースが増加。今年度の2年生約280人は県外を含む約170カ所所思い思いのFWを実施した。

一方で、個人研究であっても、個人作業



1年生の課題研究中間発表会。発表後はそのテーマについてディスカッションを行う。



2年生はFWも個人で取り組む生徒が多数。FW先が県外の場合はオンラインも活用。

図2 課題研究の流れ

学年	1年												2年												3年								
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	4	5	6	7	8	9				
活動単位	グループワーク												個別研究																				
位置づけ	基礎			地域課題探究 (転換点)						SDGs(グローバル)課題探究						グローバル課題研究																	
	グローバルファシリテーターの視野			ローカルから			ローカルへの視点移行			⇒			グローバルから			グローバルへの視点移行						グローバルファシリテーターとしてのキャリア開発											
総合探究	ガイダンス	基礎スキル養成	テーマ設定	FW (フィールドワーク) I			中間発表・論文作成	自己研究	課題設定とリサーチ	FWII・FW報告会	研究・プロジェクト化	台湾インタビュー	プロジェクト発表会	振り返り			国際会議			グローバルアカデミア						まとめ・進路研究							
教科・全体	教科学習の基礎 (意欲・関心向上)			教科連携・SDGsへのアプローチ			個別アドバイス			個別アドバイス・コーディネート			SDGs視点の授業																				

で終わらせない工夫もある。FW前のリサーチやFW後の総括などの節目には、数人グループでお互いの活動状況を共有して意見交換し、生徒同士で取組を深め合う。そのファシリテーター役は毎回、無作為に選出し、どの生徒もリーダーシップやファシリテーションについて学べるようにしている。こうした個が立つ活動を通じて、ひと皮むける生徒も少なくない。例えば、コロナ禍における地域活性化のため、長野高校生が地域の魅力を知ることのできる観光パンフレットの制作に取り組んだ生徒は、「引込み思案で一人で取材に行くのはとても緊張した」というが、地域を歩き回って飲食店にアンケート調査を行い、割引券発行の交渉まで行った。一人で考え行動できたことで自信をつけ、「人として大きく成長できた」と研究レポートで感想を述べている。

コロナ禍でも国際交流を諦めず生徒の視野を広げる

NGPのもうひとつの柱である国際交流は、多様な教科の学びと絡めながら英語4技能とICTスキルを向上させるとともに、「グローバル社会のなかで生きる将来の自分像」を意識したキャリア発達を促すことを目標に掲げる、1・2学年の学校設定科目「英語キャリアプロジェクト」を中心に展開している(図3)。

1学年では身近なものを題材にスピーチを行うといった軽い内容から始め、のびのびと楽しみながら英語を使う体験を重ねる。そして留学生へのオンラインインタ

ビューや、英語でのディベート活動へと徐々に難易度を上げていく。2学年の主な活動は、当初、台湾研修旅行で現地高校生と交流することを軸に設計していた。しかし、20年度はコロナ禍で研修旅行が中止に。急ぎよ、台湾の高校生とビデオを共同制作するオンラインプロジェクトに切り替えて実施した。プロジェクトのテーマは「Who is our hero?」、高校生と台湾の高校生がチームを組み、オンラインで打ち合わせや素材のやりとりをすることでお互いの価値観や世界観を共有し、一つの動画作品を作り出した。

同科目以外の国際交流においてもコロナ禍だからと諦めず、知恵を絞って交流の機会を設定している。1学年希望者対象の米国研修も渡航中止となったが、日本のアニメについて日本在住の留学生や海外の高校生・大学生と話し合うトークイベントを開催した。

生徒はこうした世界へのさまざまなアプローチを通じて、ローカルとグローバルの視点の融合や、多様な価値観をもつ人々と協働する重要性を学び、そのことは課題研究の充実にもつながっている。

図3 学校設定科目「英語キャリアプロジェクト」の活動例

●私の宝物・プレゼンテーション(1年)

自分の宝物を紹介し、そこから発展したトピックについてスピーチする。最初はペアで発表し合い、徐々に人数を増やして実施し、発表の質を高めていく。

●留学生へのオンラインインタビュー(1年)

立命館アジア太平洋大学の留学生との会話を通じて、国際的な対話力や他国の文化への興味を育成する。

●英語ディベート活動(1・2年)

ディベートの基本的なスキルから学んでいき、クラス内で対抗試合を行う。

●One-minute Challenge(2年)

提示されたテーマについて全員が1分間英語で話す活動。最初は準備時間を設けるが、徐々に即興で話す練習へ。

●台湾とのビデオ共同制作プロジェクト(2年)

台湾の高校生とグループになって一人のヒーローを紹介する英語の動画を制作。オンラインでライブ交流も実施。

「国際交流で生まれた海外の学生たちとの関係性は、イベント時だけで終わりません。その後も生徒たちはつながり続け、その後の課題研究や国際会議などで協力してもらったり、グローバルな活動に取り組むうえで大きな財産となっています」(松澤先生)

10カ国の人々による国際会議を生徒が英語でファシリテーション

NGPの課題研究と国際交流の集大成として、3学年では科目選択者が「SDGS 地方創生国際会議グローバルアカデミア」の開催に取り組む。ニュージーランドの大学教授から議題をもらい、国籍も年齢

図4 「SDGs地方創生国際会議
グローバルアカデミア2021」の概要

■議題:

What can Nagano learn from Covid-19 to make our region more sustainable and better prepared for the next pandemic?
(持続可能かつ次のパンデミックに備えた街づくり)

■プログラム:

2021年5月22日(土)13:00~16:00
第1部 Opening(問題提議)
第2部 Online Discussion(4分科会にて討論)
第3部 Closing(提言発表と講評)

■参加者:長野高校生、日本・アメリカ・インド・インドネシア・ウズベキスタン・オーストラリア・台湾・中国・デンマーク・ベトナム出身の高校生、大学生、社会人



昨年度に引き続きオンラインで開催した国際会議。第2部の各分科会では、出身国や地域、年齢の異なる5~6人がそれぞれの立場から発言し、時には笑い声が上がると和気あいあいとした雰囲気が進められた。

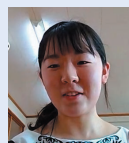


課題研究をきっかけとし、校内でフードドライブ活動を行う生徒たち。集まった食品はNPO法人を通じて生活困窮者の支援に役立ててもらおうという。

Interview

自分で学びを深めていく面白さを知った

2年生の課題研究は、人の幸福をテーマに取り組みました。幸福度の高さで有名な北欧が好きだったことから、「じゃあ長野の高校生の幸福度を上げるにはどうしたらいいんだろう」と興味をもったのが始まりです。その国の教育制度や地域社会のつながりが生活満足度に影響があるのではないかと考え、国内外の同世代にアンケート調査を実施しました。これまでに知り合った人や、言語交換アプリを通して協力者呼びかけ、海外の高校生を含む112人が協力してくれました。課題研究には1年生の頃から前向きでしたが、ここまで積極的に行動するようになるなんて予想外のこと。自分から学びを深めていく面白さを知ったからこそできたのだと思います。また、この個人研究に取り組むなかで、経済学の視点からの幸福に関する論文も読んで面白いと思ったのがきっかけで、大学では経済学の視点からの幸福について研究していく予定です。
(3年生・横山そよ花さん)



も多様な参加者たちが主に英語で議論し、提言をまとめてインターネットで世界に発信するというものだ。会議の企画・準備から当日のファシリテーションまで、すべて生徒主体で取り組む。

「この国際会議は、事前に調べたことを一方的に発表するのではなく、多様な価値観をぶつけ合って議論する部分に軸足を置いています。会議の場で出てきた多様な意見も取り入れて、自分たちの提言としてどうまとめていくかは非常に難しいところですが、生徒たちは果敢に挑んでいます」
(松澤先生)

21年度は「持続可能かつ次のパンデミックに備えた強い街づくり」を議題に、10カ国の高校生や大学生、社会人の計34人が参加してオンラインで開催(図4)。ファシリテーターを務める科目選択者以外にも、同級生や下級生が運営サポートに当たった。4分科会に分かれて行った議論では、

それぞれファシリテーター役の生徒が工夫して議論しやすい雰囲気づくりを行い、活発に意見を出し合った。

ファシリテーターの生徒は英語でのコミュニケーションやオンラインでの発言の促進に苦戦しながらも、終了後は「自分とは違う視点からの意見が新鮮だった」「日本ではあまり出ない発想の意見も聞けた」「一人ひとりが活発に意見を出してテーマを深く掘り下げることができた」など達成感を語った。

◆提言にとどまらず自ら行動を起こす

文科省の事業は本年度で終了するが、NGPの取組は今後も発展させていく方針だ。その背景には、3年間で大きく成長する生徒の姿がある。

「最初はやらされ感から入る生徒や、自分の考えを伝えるのが得意ではない生徒

もいます。しかし学年が上がるにつれて自ら取組を深めていく生徒が増え、教員の手出しや口出しはほとんど不要になっていく。NGPをはじめとする高校生活のさまざまな経験のなかで、自分はどう社会と関わっていきたいか、それにはどんな力が必要なのかを考え、自分たちの地域のために活動していこうとする意欲が引き出されているのではないだろうか」
(海沼先生)

3年間のNGPで目指す活動は、地域課題に対する政策提言だが、近年、生徒自ら、提言の枠組みを超えて行動を起こすケースも出てきた。例えば、昨年度の課題研究から食品ロスの問題に取り組んでいる3年生2人は、自分たちにはできないことから始めようと、家庭で不要になった食品を回収して食料困窮者に届ける「フードドライブ」の活動を行っている。全校生徒に協力を呼び掛けたところ、連日たくさん

の食品が集まり、活動に共感して手伝いを買って出る後輩も現れた。このように一歩踏み出す活動を、今後さらに増やしていきたいという。

「理想を語るだけでなく、高校生にもできることはないかを考え、実際に地域に貢献する活動をやってみる。そして卒業後も試行錯誤を続けていく。そんな流れを後押ししていきたい」
(海沼先生)

個人研究を取り入れたことで、生徒一人ひとりの興味関心を掘り下げる取組となったNGP活動。それを生徒それぞれのキャリアにつなげることに、今後重点を置いて取り組んでいくという。

「NGP活動のなかで、いかに将来にわたって追い求めるテーマを見つけ、進路にもつなげていくかが今後の課題。継続してプログラムの進化を図るとともに、進路指導との連携強化などにも学校全体で取り組んでいきたいと考えています」
(海沼先生)